



ワキ男付

弱法師

ふりし者河内國高安の里に在り
尉通後と申者少くはねし果しと
ていふと去るに談言より。言ふに
いふに今ハ何なりと不便なるは
まゝとく一七日施行をいふ。今
満美よりく程の程に付施行をい

七、
 夜のさびしきと急ぎあふね
 吸の毎度庫井あふ深に思ひまゝ人
 ちこい^{お上}久^{お上}鷺^{お上}鴛^{お上}の襖の下より立
 さる思ふを^トあふ^ト足^ト此目^トを^ト極^トの^トよ^トま
 顔を隔る愁有^ト知^ト心^トを^トあふ^トあふ^ト人^ト同^ト方^ト
 お、^ト方^トを^トあふ^トて^ト身^ト年^ト月^トの^ト流^ト事^トそ^トへ

いせの山に中は落る。吉野の川を
ふりやせも思ひもさへねくれば
ちや新世は誰より賤ひきんづけ
人忠談言より不孝の罪は沈む
馬目の海掻きう曹司とて成る
生ももろぬいせより中有り
はるあはれ^新本より^元心^元の闇なる

葉の青目の足弱車をいふあり
うめれありきり弱法師とふ付
びふりや 文の槍の言の
いも情有けふあふそやまのく
難門を受給へ けふせふ
感の香るやいふち候はれち
るにめを けふ是あは離の

梅の弱法師の神の散りてとよ
梅のやち弱法師の言のあふれ
こふたをいふきふ今ふとそ
ふりて梅のちりて首の押は
きふ二月の雪の夜ふりて面白
の梅の白いふれ 文の神の
受給へけふあふけうとよ

中ノ事本國土悉皆得^レ施

行あり^テ皆成佛の大慈悲^ニ

我^レも施^ス行^ハよう^ニあり^テ手^ヲ

合^ニ袖^ヲと^テ攤^キそ^レ日^ノ暮^ルに^テさ^ニう^ニさ^ニ

施^ス行^ハの^ハよく^ニ句^ハい^ハら^レる^ニま^ニあ^ニ

衣^ヲも^テあ^ニは^ニる^ニや^ハ後^ノの^ハ事^ヲり^テあ^ニれ^ニ

あ^ニら^レる^ニい^ハく^ニさ^ニし^テ極^ニ盡^スス^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

あ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニあ^ニら^レる^ニ

是に因てに宮を子國家とありて
萬民を之に佛法流布の世に
てありて其の佛法を弘め
多き及當寺に建立する
僧尼の姿を弘め四天王寺を号け
て入主堂に於て本なる如意輪の佛
像救世觀音の心願を成ずるに
震旦國の思禪師よりてわづらふ

故に家々佛像ありて今自域
よりて弘め弘法大師の御本を弘め
まにまに威光を宣ふありて末世
相違の如き誓ひありて當寺に弘め
なつるもの品も亦拂檀の具なる
塔の金ありて弘法大師の檀金成

萬代にわたる水
水に清く西天を染めたる池水を受
つるに流るる數世を流るる五濁の人
國を穿つて所度の深さを示す
あまの磯の寺の鐘の聲と浦の
響きとであはれくらゐのうらた
しめ海山をもくわへ佛の姿あり

思ふもの者さうや成るるを思ひてい
へる果ううあひたる子あはれなるま
思ひのゆるさ目も成てはあはれ不便
と妻へていそや晝る人目も流るる
同夜に入果るる系高安へつきて冷
まやとなゆるる弱法師目も歡の
時さあはれ急しあはれ

教諭府公

七

惣觀の時をある一盲目あり
そあるやうなるにありあふ目と云ひ
東門と稱し南無門と云佛
なつとい謂あるや西門石鳥およ
けり愚々天王寺の西門と云く極
其東門は白の僻事なりいぢまてモリキ
難波の寺の西門と云名鳥井入

阿字門今
阿字門今
極樂東門
入見影もほ
西の海
難波
常々あり
鐘聲行かぬ

[illegible]

松原 東のふし時と得く
 乃緑の香山 北のつる
 あまの長柄の
 貴賤の人は行あひの車ひ雲の
 波はよき

夜はふしし明ぬさるゝといふあゝ高
安の里にふりもきく

徳成
時宗

小神曾我

今よりふりし里に富流し
野と稱ふ是ハ曾我十郎祐成

三つはおれは度鎌倉殿百流は將

東ハ箇國の大ふ小ふ皆ハ御供

ゆれは我等兄弟も人あふはれ

我は之弟より人者ハ敷世ハ勘當

て御侍のやと^{六ヶ}時^七申直しづき

建久四年五月半の富士の宮又月雨

雲の降るまで^の富士の宮又月雨

の^の野々原八里月夜鎮倉殿

御侍の^の抱えたり^の事

東八箇國^の兵も皆御供ある

宇^の敵の御経も^の事

の^の報討^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

の^の御経も^の事

少祖曹太公

小田原公
 根子揚とやと思ふなるは
 大とて君の御ころあふ
 手おありぬ方々中へ怖ま
 けりやうとて十郎殿へ之次で
 ともや母方為り態といふも
 白鹿の為御侍せしは
 とも思ひし事とて君へ為すは

次下也

祐明上

親子

寺

戲

あつても時字の不孝の才あり及此の
いふより同筆上なる山忠峯人の雲金
所又の書きてや愛ある子なり
同じくその子とあれと隔れ
是よりそとてたゞさるゝて成

小神曹我十八

小神曾我十之三
三
ふくみふくのちてあけつたひと
のたまふの時字をふまふは
ありふもふも同子の方まで
えりふの隔有るゆき
いつの時字日本一の機嫌まで
しうあぐま日局して
畏ていさる春日女局の御

時宗ありたりとるうー人
野の龍火虫野寺
唯今まうおひぬぐ秋窮入禪所
あり有るれあうて子ありと時宗

といたそへ思ひなり箱根のま
 存箱王とひりゑとそのおそれ
 ある母の家はありとプーとき
 くるしむに即當せし推て是は
 来きおへに當て入即當そや伊豆箱
 根軍権現を沙流きよに其度も
 勘當そや テ 於誓とに部をたを

里
 なる家にて仕組と成るなり
 此方よりそや責て今一目見
 儿帳をわたりあつ情おれた事や
 祐成へくもあつて時宗の時う
 たりとあつて中門をえり
 ちやあつてと招き及ふなり
 山七や死 早 流きあつたりて

小徳義抄

五

毛親の杖ありにきく去る
あつてもいふ去る時宗

御杖様へ何とありて
式し以て

の御杖様とて御堂へ御勤當に

依祐成言諸乃断り事とて依物に

北度へ某同心時御前よりいへり

とて御杖様よりいへり

思ひもよういへ時いふ方某より

とていへり御杖様時宗よりいへり

御勤當に能く是と案し

祐成もいふ思ひありて時縦時

宗出家の暇とて兄祐成時郎等

ありて自らいへり

とていへり

慈悲の母とて人々を救ふ時

宗と出家とありぬとれた勘當早綴り

と臨ひ出家とありぬとれた事と

世に臨む所とありぬとれた津子と

とと敵とのありぬとれた家と

求はるる為とありぬとれた思ひと

とぬへらるるも縁ぬ墨衣のときと

二の箱根寺とて明き悔いと思ふ

ありぬ中へ倍とありぬとれた時宗と箱

根とありぬとれた華經一部と

とて常へ讀誦とありぬとれた現世安穩

後生善所と初念とありぬとれた毎日と六

萬遍の念佛と河津殿と回向と

うへに地念ありとた三とて不孝と

祐成^ハ斗^ハハ時宗^ハの勘當^ハと教^ハとて有^ハ

ゆき^ハきく酒^ハとてめ^ハい^ハも将^ハ場^ハ

をい^ハひてゆ^ハゆ^ハ人^ハ畏^ハてゆ^ハる^ハは

時宗^ハぢうく^ハとてあ^ハう^ハく^ハぶ^ハゆ^ハて^ハも

は^ハ時宗^ハう^ハく^ハぞ^ハゆ^ハ心^ハを^ハく^ハて^ハふ^ハん

い^ハう^ハ思^ハひ^ハ子^ハの^ハ母^ハの^ハ情^ハ有^ハ親^ハや^ハゆ^ハ

ま^ハ娘^ハに^ハ祐成^ハに^ハ酌^ハを^ハま^ハく^ハる^ハは

時宗^ハと^ハも^ハに^ハ言^ハと^ハて^ハう^ハく^ハ

高^ハに^ハふ^ハと^ハ雲^ハを^ハ揚^ハく^ハ面^ハを^ハ根^ハの^ハ雪^ハ

と^ハめ^ハる^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

う^ハと^ハて^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

の^ハり^ハと^ハて^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

目^ハと^ハて^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

思^ハへ^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

思^ハへ^ハは^ハ時宗^ハの^ハり^ハと^ハて^ハふ^ハは

小徳曾我六三
 軍野の沖將の折と得て年々
 敵をくつとともくをすし思ふ嘆患の
 焰胸の煙と面をくつとともく
 月と清見う園子とくつとともく
 あら元才親存門の例とくつとともく
 さふ

早詞

東岩屋

是を東回りの者しくは我は程
 を妙よりう。洛陽の名所旧跡一見
 侍々々。又今に洛あり寺とあるや
 とわし。松とさく皆様と吹
 ちあして花とさくあし。昨
 文世の流りある事とくつとともく

しあきとくしんくふく少くきんめふ
たやば泡沫又たきしなうりつるを
世のちり所^かつれ日^ひけも小車^{こぐるま}れく
及^{およ}と^とり^りふ^ふ自^{みづか}河^かの^のま^まき^きを^を橋^{はし}柱^{はしら}
ま^ま右^{みぎ}邊^へま^まき^きい^いづ^づか^かく^くい^いふ^ふや^やん^ん是^{こゝ}

を承^{うけ}及^{およ}き^きう^う東^{とう}岸^{がん}后^ご士^しや^やく^くは^はは^はり
ま^まく^くは^はふ^ふる^る后^ご士^しま^まく^くは^はあ^ある^るは^は今^{いま}も^もは^は

へ^へき^きう^うあ^ある^る聴^{きこ}す^すの^のま^まは^はう^うに^にい^いま^まあ^ある^る
ら^らし^しき^きい^いと^とう^うれ^れ聴^{きこ}す^すと^とい^いふ^ふも^もは^はカ^カラ

は^はま^まあ^ある^るせ^せん^んの^のま^まは^はう^うに^にい^いま^まあ^ある^る
柳^{やなぎ}を^を緑^{きよ}花^{はな}は^はれ^れあ^ある^るあ^ある^る面^{おもて}白^{しろ}乃^の玄^{げん}
の^のう^うき^きな^なあ^ある^るふ^ふふ^ふも^もは^はあ^ある^る河^か

答^{こた}ふ^ふあ^ああ^あこの^{この}橋^{はし}を^をい^いふ^ふの^の世^よう^う。後^{のち}
し^しあ^ある^る橋^{はし}や^やく^くい^いづ^づか^かく^くい^いふ^ふは^はあ^ある^るを^を師^し

三十一

是の橋をたぬは

飯舟はうねるや

うねるやうなうねる

是も狂言詩のうねる

轉法としてのうねる

曲いさるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

うねるうねる

東山亭

四

同上

四上

三

一

永

曲下

卷之四

二

一

多

四

史記

いけいよまた又君おしの様も

まのくはつとをきらなゆわさ

こふれと子下めし飯をくらう

の被ふをとも秘をきこのほの

ほふこをも紅蓮を宿蓮の氷を

終まらひすあし多しわたのふ飯

のきふ眼と。慈悲の所ふれを

とせう好のたせう好の笑を

終ふあらめしかれはあき

持て殺生とて邦嬢の身ふりて

作れ罪ありきこふものさあき

いふ作れ罪ありきこふものさあき

そまふをひく地をいふれを

こふれは皆飯をいふ

幸
 而無三寶
 乃大日上
 乃太報
 乃毛

笛ひらきんらん
 小極子の
 きのの遊ひと國地と
 何と
 唯多や氷と多るそ
 萬法皆一如か
 此実相の門子と
 何と

行像

木
 定りりき世の中こもくうきる
 やおしめと
 是は才實益人行

家出の物、我々より甲斐りも令
かしく、此後津回天王寺より
餘り都より移し、ひとより無
のか、我々より、上二二二二二那波上二二二二二鐘と

志^二人^一子^二起^一去^二知^一急^二心^一何^二在^一賓
 此^二身^一所^二臨^一傳^二入^一去^二并^一此^二心^一何^二在^一賓
 浦^二心^一何^二在^一津^二心^一何^二在^一賓
 凡^二是^一と^二傳^一王^二舍^一心^二何^一在^一賓
 此^二身^一所^二臨^一傳^二入^一去^二并^一此^二心^一何^二在^一賓
 浦^二心^一何^二在^一津^二心^一何^二在^一賓

おきくまゝに
 一棒りやうと
 やく都の宿より
 一にわのちを
 横は花風月
 是は山口西塔北谷
 丁に梅も木首れ

とてふのさふふとて今討まふ家

いふに世のふ本宮のま人行家海なる

正のい定ふまていふ人 陣は

の人を是のいふ人ふては

まふ陣しきふと叶ふいふ人

とていふいふ本宮のま人は

あう見えふいふまていふいふ

一回ふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

のちちかたむく可とむい
 物しやと上常ほて常陸より組
 常陸海へ島ホいそげくけ家
 しょうけと島よりして投たま
 まの共落ふまうけ家とけりて
 けう大橋中よなめてけい
 海衣いふく共いふとてけり

平僧沐

碓替

雲とあふけきふく月
 向反と書す 是ハ初るよき
 寺に依りて西國と云ふ
 思自立西國門脚と云ふ
 浮世の極ふと云ふ 宿定
 捨えふけ行まふけ

碇潛下ノ五

シテ尉

帝は海に
 まゝのまゝ
 もくもく
 名物あつた其の中へ
 あつた釣物を
 世に業を賦し
 声もある海の子
 あれがはなはた
 弘安

子製頭子ひねり
 是ハ二業妙也

[illegible][illegible]

不^レ承^レ形^ノのま^レ及^レ新^ノ經^ハと^レ方^ヲそ^レあ^レく

長^ニ刀^ノ投^テ捨^テ腹^ヲく^レ吐^キあ^レる^ヲを^レつ^テ

ふ^レふ^レを^レり^ニ入^リか^レる^ヲも^レ前^ニ少^ク安^ニ藝^ヲ五^ノ郎^ノ

同^ニに^レ次^ニ良^ノ兄^ノ弟^ノ二^ノ艘^ノの^ノ舟^ヲ押^シよ^セ

能^レ登^リ守^リう^レる^ヲに^レみ^レき^ニお^レけ^ニゆ^キに^レ

よ^レの^ノま^ニう^レる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲ

ふ^レや^レ真^ニ金^ノの^ノ侍^ヲよ^レつ^テま^ニこ^ニを^レる^ヲを^レる^ヲ

肘^ヲと^レう^レる^ヲに^レま^ニう^レる^ヲを^レる^ヲを^レる^ヲを^レる^ヲ

よ^レて^レい^テる^ヲに^レ石^ヲの^ノ眼^ヲを^レる^ヲを^レる^ヲを^レる^ヲ

底^ニに^レ沈^ミる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲ

ち^ニに^レの^ノ跡^ヲを^レる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲ

て^レに^レの^ノ跡^ヲを^レる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲ

折^ニに^レの^ノ跡^ヲを^レる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲ

跡^ヲを^レる^ヲに^レお^レか^ニそ^レ刀^ヲそ^レい^テる^ヲを^レる^ヲを^レる^ヲ

ちるゝ大なるひびくさてもわ
 るもの海をきこも流るるなり
 漕もよ清湯のの邊ありぬを
 舟の中より弾より松曲のう
 名にひ浪も玉にちるぬ琴の
 凡音ありきり事なり
 大納言の月へ音は流る静なり

月と教諭あることの行事は
 とせしむる梶を責て八月と松の
 く吹くあやうき夜に
 月をなすスオと観る時
 月をなすスオと観る時
 つまらぬなり
 合戦今もなり
 新中

納言^{ナリ}の^{ナリ}登^ノ二位^ニ殿^ノ下^ノ今^{イマ}は是^{コノ}に
痛^{イタ}りあ^ハる行^{ユク}幸^{サキ}を^ヲ彼^{カノ}の^ノ底^{ソコ}を
一^{ヒト}手^テ分^{ワケ}所^{トコロ}供^{ツケ}り^トる
夜^ヨを^ヲ播^ハへて^ニ宣^{ノリ}へ^ニ二位^ニ殿^ノ下^ノ今^{イマ}は是^{コノ}に
以^モて^ヲあ^ハり^トく^ニを^ヲ立^タて^ニ今^{イマ}は是^{コノ}に
立^タと思^{オモ}ふ^ニて^ニ白^{シロ}い^ニ様^{サマ}の^ノつ^ツき^キを
あ^ハり^トく^ニ神^{カミ}皇^{ミコ}と^ト服^{フク}を^ヲも^モる^ニを^ヲ宣^{ノリ}へ^ニ

腰^{コシ}より^ノ大^{オホ}納^{ナリ}言^{コト}の^ノ局^{クマ}に^ニ内^{ウチ}侍^シ所^{トコロ}を^ヲ裁^サ
つ^ツ皇^{ミコ}居^イる^ニあ^ハり^ト跪^{ヒツ}き^キを^ヲ奏^{ソウ}國^{クニ}申^{マシ}
る^ニ三^{サン}國^{クニ}を^ヲ下^シに^ニ達^{タツ}し^キを^ヲ前^{マエ}に^ニあ^ハり^ト
る^ニ一^{ヒト}手^テ分^{ワケ}所^{トコロ}の^ノ底^{ソコ}を^ヲ音^{オン}官^{カン}と^トして^ニ目^メを^ヲ
度^{タク}京^{キョウ}の^ノ内^{ウチ}侍^シ所^{トコロ}を^ヲ裁^サ
く^ク奏^{ソウ}し^キを^ヲあ^ハり^トく^ニを^ヲ立^タて^ニ今^{イマ}は是^{コノ}に
あ^ハり^トく^ニ神^{カミ}皇^{ミコ}と^ト服^{フク}を^ヲも^モる^ニを^ヲ宣^{ノリ}へ^ニ

東に白く分る。自天照る神にたいは
 へ。さへ給ひ其右西方より十念を
 終る。あは三位殿のやきく玉守を抱
 目とさくく。底へ入る。あは
 叫ぶ。事なをさくく。あは
 くらへ僧のくらを夜とく。口説
 ひ。は。揺曇る。頻る。く。か。

四ノ二五

あは。及石を。ひ多く。あ
 ろ。き。く。今。は。是。は。沉。ま。こ。そ
 鑑二領。は。兜二羽。其。才。を。室。か
 さ。こ。も。あ。は。仲。入。破。虫。大。細。急。わ
 く。と。あ。は。け。く。兜。の。く。入。は。破。を
 戴。き。く。海底。より。入。は。き。く

[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

下係之音曲先年白米田堆令
板門也散註教番因有脫落之
近厥亦今亦後白米田令用板者也
章句声付不順疎意所可自也
從之學士有效受改南都伯改正之

貞享三曆

丙寅

京都

吉田德興春滿正

江戶次原辰經春

霜月

